

広報

おおす

2024

7

No.234

(特集) 地域と支え合う。「長高」のいま



久米小学校緑の少年団による記念植樹が行われました
(関連記事9ページ)



(特集) 地域と支え合う。「長高」のいま

長浜高校水族館部のみなさん

「志願倍率1.05」—— 今年2月に発表された県立高校入学志願者数で県内でも数少ない定員を超える志願者数となった長浜高校。4月からは「長高水族館」が近隣の長浜保健センターへ移転。さらに活気づく同校のいまについて取材しました。

(写真協力：長浜高等学校)



長浜高等学校は今年で創立86周年を迎える

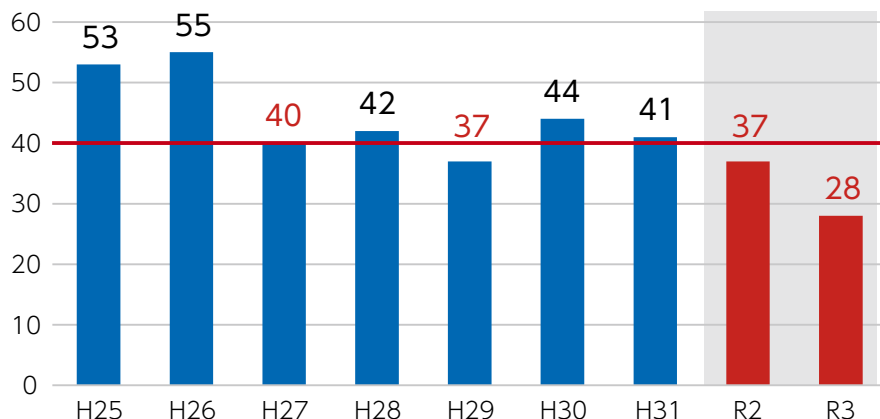
危機を乗り越えて

「あと1年」で分校に

長浜高校は一学年の定員が60人の小規模な高校ですが、少子化と進路選択の多様化により定員を下回る期間が続き、令和2年度と3年度の入学者数は40人を割ってしまいました。県は「入学者40人以下が3年間続けば分校化の対象に」という方針を打ち出していて、これまで単年で40人以下となることはありましたが、今回は2年連続。

このままでは分校、そしてその先には高校自体が地域からなくなってしまうのでは…という懸念が広がりました。

入学者の推移（令和3年度まで）



このままでは
分校化の対象に

学校が動く。生徒が動く。

この危機に学校はもちろん、生徒たちも動きます。

長浜高校は生徒の募集を全国へと広げようと、地域留学の募集サイトで全国で唯一、水族館部のある高校として特色をPRし、オープンスクールも開催しました。

ここで主体となって活動したのが生徒たち。水族館部員を中心にSNSでの情報発信や説明会での案内役をこなし、オープンスクールでは地元外への進学に不安を抱く中学生に対して、兄や姉のように相談に乗りました。

また、大洲市も県外や遠隔地からの入学者に対して下宿費や準備費用を助成する「長浜高等学校生徒応援事業費補助金制度」を創設し、保護者の負担軽減を図るなどの応援体制を整えました。

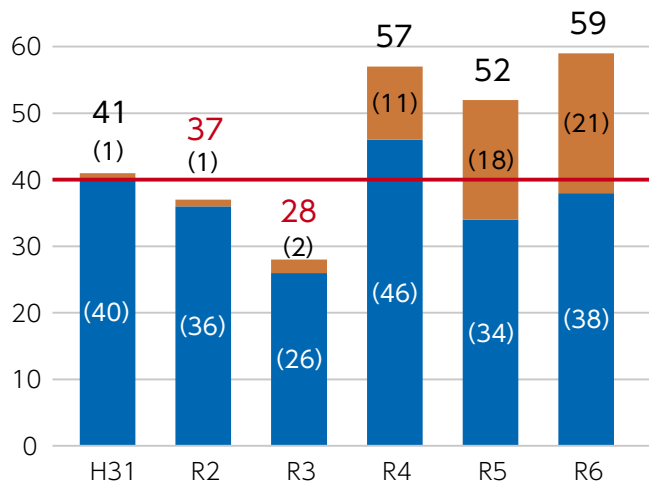


説明会には全国から多くの中学生や保護者が詰めかける



オンラインの説明も生徒自身で行う

入学者の推移（平成31年度から）



オレンジ色の部分が県外から進学した生徒の数。
いまや全校生徒の30%ちかくが県外出身者。

全国から「長高」へ

その結果、正念場となった令和4年度の入学者数は、県外からの進学生11人を含み57人と定員に近い生徒を迎え入れることとなります。分校化を免れた長浜高校ですが、生徒達はそれに安心せず自ら情報発信を続けます。

長浜地域での高校生活を4コマ漫画で紹介する「長浜すく〜るらいふ」の連載や遠距離の人へのオンライン水族館などさまざまな方法を試みることで、さらに注目を集めることに成功。

そして令和5年度は52人、続く今年度は59人と北は北海道から南は沖縄県まで全国各地から若者たちが長浜高校の門をくぐるようになったのです。



長高水族館の歴史

長浜高校の大きな魅力である長高水族館は、昭和60年まで長浜地域にあった長浜水族館の復活を願う地域活動のメイン事業として平成11年に始まりました。母体となった自然科学部（平成23年から水族館部）は教室を利用して水槽を設置し、自分たちの手で近くの海から魚を集めながら少しずつその活動を広げていき、現在では150種2,000点以上の生き物を展示する規模になりました。また当初から飼育だけではなくさまざまな研究も同時に行い、素晴らしい成果を上げています。



左：生物教室に展示していた初期の水族館

右：世界的な研究コンクール「ISEF2015」に日本代表として出場





「長高食堂」の夕食準備は自分の家事などの合間を縫って。時間との勝負になるが、にこやかに手際よくこなしていく。

地域が支える生徒の日常

5月1日現在、親元を離れて下宿生として長浜高校へ通う生徒は合計で59人にも上ります。急激に下宿生が増加したことにより、まず課題となったのは「食」と「住」。長浜高校が直面した問題の解決には地域や企業、そして保護者それぞれの思いが力になりました。



「ただいま」「おかえり」の関係

下宿生の食事のサポートは現在、長浜地域の飲食店「かねや」と「たかざわ」さんの2店舗と保護者による活動によって支えられています。

この日も午後7時を過ぎるとかねやにお腹を空かした生徒たちが「ただいま」の声とともに続々とやってきます。それに「おかえり！」と大きな声で応える志賀^{かずみ}和美さんは、現在の3年生を1年生の頃からサポート。住居部分である1階の部屋を開放し、生徒たちがくつろぎながら食事ができるようにしました。

食事の提供を始めた当初、生徒に向けてアンケートを実施。「朝や昼は軽食で済みます生徒が多いことがわかり、夕食でしっかり栄養をとってもらわなければと責任を感じた」と振り返ります。成長期でもある高校3年間。「毎日お腹いっぱい食べて、元気に巣立ってほしい」それが志賀さん夫妻2人の願いです。



「かねや」を経営している志賀^{ゆうじ}友治さん、和美さん夫妻。和美さんは管理栄養士の資格も持っている



宇都宮^{あさひ}旭さんは1年生からかねやの味に親しむ3年生。大好物は地元で獲れた魚の刺身だそう

「長高食堂」の誕生

「『孤食』だけは絶対にさせたくなかったんですよ」長浜高校PTA会長である鈴木眞由美^{まゆみ}さんは、夕食の準備の手を休めずに話します。

今年の新入生で下宿を選択したのは過去最大の27人。長浜地域の飲食店だけでは、下宿生全員の食事を賄いきれない数となってしまいました。先の飲食店での食事と業者からの弁当を1年生から3年生でローテーションさせる案もありましたが「それだと一人ぼっちでお弁当を食べる子供が出てしまう」と危惧した鈴木さんは、地域内の空き家を利用して食事を提供しようとPTAを中心にボランティアを募ります。なんとか4月からの提供に間に合わせ、毎日のメニューに頭を悩ませながら奮闘する日々。それでも親元を離れて暮らす子供たちのため、今日も温かいご飯と笑顔で迎えます。

この日のメニューは中華。チャーハンだけで2升6合のボリューム。丼物なら3升炊くことも珍しくないという



「長高食堂」今日の出勤は左から久保沙織^{さおり}さん、鈴木さん、乗松さおりさんの3人



洗い物は生徒の役目。入学したての1年生も慣れたものでテキパキと片付ける



神野支店長は自ら空き家物件の状態の調査などに奔走



濱田さんは「応援する会」だけでなく長浜高校のスクールライフアドバイザーとしても生徒を見守る

企業の決断と地域の応援

長浜高校は、元々は地元の生徒がほとんどを占める学校だったこともあり、寮などの設備がありません。

「長浜高校に進学したいが住むところが…」という悩みの解決に地元の企業が動きます。窮状を知った伊予銀行は、長浜支店の社員寮6室のうち3室を生徒用の部屋にと貸し出すことを決断。その後も増加する下宿生のために、空き家の情報収集や仲介役として長浜高校を応援し続けています。「生徒が増えること、空き家を活用することは当行の企業理念である『潤いと活力ある地域の明日を創る』^{つくる}にも通じる。地域全体が生徒たちを見守る『地域寮』として先進的なモデルケースになっていくかも」と神野^{じん の いづき}支店長は今後を見据えます。

また、長年にわたって長浜高校をサポートしている「長浜高校を応援する会」の会長である濱田^{なかし}毅さんは「住居や食事の確保に加え、安全性の面など下宿生が増えればクリアしなければならない課題も増える。連携しながら生徒たちの生活を支えたい」と活気づいている高校の現状を喜びながらも気を緩めません。

学校と保護者、そして地域が一体となった取り組みが、いま大きな実を結んだのです。



水族館公開日、部員の説明に子供たちは目を輝かせる

地域に根差す活動を

地域からの熱意に負けじと、地域を見つめ、地域に根差した活動で期待に応えようとする生徒たち。
ここではそんな活動の一部を紹介します。



地域の課題を共有し取り組む

長浜高校が積極的に取り組む活動のひとつに「地域探求活動」があります。地域を知り、地域が抱える課題の解決に向けて高校生自らが仲間と協力しながらさまざまな方法を実践するこの活動は、国立青少年教育振興機構が主催する「地域探求プログラム」でも、その内容や独自性が高く評価されています。

また、部活動の一環やボランティア活動として農家の収穫やイベントの手伝いなども積極的に行い、若い力が加わることで活性化にもつながっています。

同校のキャリアデザイン教育に関わる愛媛大学の^{まこと}前田眞客員教授は『『自分はこちらでこんなことをしたいんだ』という目的意識をもって入学する子が多く、それが自らが動いていく原動力になっている』と生徒たちからエネルギーと可能性を感じています。



前田眞客員教授

地域探求プログラム受賞歴

年度	取り組み	受賞
R 2	長浜ゴミ0プロジェクト	文部科学大臣賞
R 4	長浜すく〜るらいふ	国立青少年振興理事長賞
R 5	「長浜」生き物好きの聖地化プロジェクト	文部科学大臣賞



商店街を彩るガラスアート



地元農家とのコラボ商品開発



イベントでは貴重な戦力

長高水族館が移転オープン

そしてこの春、長浜高校からまたひとつ新しいニュースが届きました。

建物の老朽化などに伴い、長高水族館は高校に近接する長浜保健センター内に移転。4月20日(土)には移転後初めてとなる公開日を迎えました。

90人以上の大所帯となった水族館部ですが、顧問の重松洋教諭は「この状態ですから、もう生徒たちに任せてます」と苦笑い。しかし、その言葉どおり生徒達は指示がなくとも自分たちで考え、動いて水族館を運営しています。公開日に水族館を訪れる観覧客は最大400人。展示されている生物の説明はもちろん、駐車場案内や子供に向けたクイズ大会、自分達の研究成果の発表までこなしていきます。

東予から訪れたという家族に話を聞くと「説明する部員から生き物に対する情熱が伝わってくる。今日この公開日に来たことで、息子もこの学校への進学を真剣に考え出したようだ」とのこと。

懸命に取り組む部員の姿もまた、地域と支え合う未来の長高生を生み出す力となっているのでしょう。



移転リニューアルした水族館



知事も新しい水族館を訪問



水族館活動の立役者で現在も顧問を務める重松教諭



部長の西岡春陽さん。親元を離れた新入生のケアもこなす



「絆が財産」長高のこれから

最後に長浜高校のこれからについて^{ひろみ}中岡容美校長に話を伺いました。

「赴任以前から長浜高校の活動についてはメディアなどで知っていたつもりでしたが、実際に目の当たりにすると驚きました。そしてそれ以上に驚いたのが地域の温かさ。その地域の支えに応えるべく生徒全員ががんばってくれています。これからも地域のみなさんで築き上げてもらったこの素晴らしい絆を大きな財産として、生徒たちの未来への可能性を広げていくのが私たち教員の役目だと考えています」



今年度から赴任した中岡校長